

## 自己非自己構造の意味

——現象から意味へ——

川 岸 克 己

The Structure of Jiko-Hijiko: What is it's Purpose?

Katsumi KAWAGISHI

### 1. 現象から意味へ

日本語のいくつかの文法カテゴリにおいて、不思議な現象が存在する。ひとつの文法カテゴリのなかに、ふたつの単語があたかも対をなすかのように存在する、という現象である。日本語では、いくつかの文法カテゴリにおいて見いだされるが、主に助詞や助動詞にそういった現象が顕著である。

私は、この現象を「自己非自己構造」と名付け、研究を続けてきた。とはいえ、研究の当初から、対をなす構造に特別な意味を見出していたわけではない。はじめは、古典語の疑問を表す係助詞には、ヤとカのふたつがあって、これらはどのように使い分けられているのか、という文法論的あるいは語用論的視点からの研究がはじまりであった。その結果、カとヤは、既知の情報か未知の情報かによって使い分けられていることや、他者を想定するか否かによって使い分けられているということを、結論として得ることができた。さらに研究を広げていくと、他の係助詞においても、たとえば、ナム／ゾ、コソ／シ、などにも同じような意味をもちながら一対の関係をなすという現象がみられる。そして、その意味は、既知と未知であったり、他者とのかわりの有無であったりと、類似した関係を構成している。他にもあるのではないかという視点からこの現象を探っていくと、係助詞のみならず、副助詞や格助詞などにも同様の現象を確認することができた。そしてさらには、助詞のみならず、助動詞にも同様の一対の関係を数多く見いだすことができた。

最初は、同一文法カテゴリに一対の単語という現象が、なぜ複数の文法カテゴリに存在するのかという点に疑問を抱いた。そして、次第にそれら対になっている単語には共通する普遍的な意味がその深層に存在することが分かってきた。個々の一対の構造を分析すると、その表層の文法カテゴリとは別に、その深層に根源的な分析基準が存在することも分かってきたのである。そしてそれは、表層的な文法カテゴリで表現される内容のものが、さらに言語主体と緊密な関係にある内容なのか否かを分節する基準であった。私はそれを自己非自己構造と名付けた。

同一文法カテゴリに存在する一対の単語における使い分けについて個々に研究していたものが、あちらにもこちらにも数多く見出せるようになって、さらには前述のとおり、そこに共通のものが存在することを発見した結果、これを単なる偶然でできたものと考えすることはできなくなって

きた。

なぜ、言語は、表層的な文法カテゴリとは別に、その深層に「自己」と「非自己」とを峻別する分節基準を有し、それを表現形式（単語）のレベルに現出させるのか。

一対の単語群に対して、単なる偶然と思えなくなった瞬間、その個々の現象のなかに、なんらかの「意味」が存在するのではないかという疑問を抱くのは当然であった。

現象の指摘から意味の探索へと研究の関心が移行したことは、偶然ではない。スイスの心理学者であるジャン・ピアジェは、個人における認識の発生あるいは発展と、人間の認識の系統的発生の間には、深い相関関係がある、と主張した。我々の認識は、最初に対象と事例について、一連の特性の発見にみちびくが、局部的で特定の説明しかみいだすことがないとし、さらに、確定しなければならない理由は、対象間の関係についてしか見出すことができないとしている。最初は現象を見出すことに関心が向けられるが、次第に、その理由に関心が向けられるものであるというのである。そしてさらに、そこで見いだされた理由は、相互の関連の確立を要求して、最終的に「構造」の構成に結びつくというのである。

したがって、自己非自己の研究が、これまでの現象の指摘から意味の探索へと移行していくことは、人間の認知の歴史に鑑みれば、当然の展開なのである。

## 2. 生命のロジック

自己非自己構造の着想およびその存在理由について、私は一冊の本から、大きなインスピレーションを得た。人間の免疫機能の構造とその意味を論じた多田富雄の『免疫の意味論』（青土社、1993年）である。

ヒトとしての生体は、最終的には脳によって統御されているのではなく、免疫によって統御されている、と多田富雄は論じている。我々ヒトが自己同一性を確保するためには、脳が全体を統御するのではなく、免疫機能が全体を統御しているのだという主張は、衝撃的であった。なぜなら、私の一連の研究から浮かび上がってくるのは、自己非自己の二項対立が生じさせるのは、言語主体による「自己」という存在の立ち現れであったからだ。

多田富雄は、生命機械論的なメカニズムに支えながらも、やがて機械を超えて生成していく高次のシステムとしての免疫系に対して、「自己」というものを自ら作り出してゆく「スーパー・システム」として定義づけた。スーパー・システムは、「刻々と変化する外部および内部環境に可塑的に適応して自己組織化してゆくシステム」（『免疫の意味論』p46）のことであるという。簡単に言えば、免疫というのは、生体に自分以外の異物が侵入してくるとき、それを排除するための機能である。この免疫は、どのようにして自己（自分）と非自己（自分でない異物）とを区別するのか。多田富雄によれば、実は、免疫細胞は直接的には非自己を発見し、排除することができないという。非自己そのものには反応することはなく、非自己をまず自己の中に取り込み、自己を非自己化するという。それが免疫細胞によって認識されるというプロセスを経るらしい。

このような免疫系による異物の排除の仕組み、という生物学における認識の発展が、免疫機能の個々の現象の解明から、免疫機能の存在理由へと移行していったことは、まさにピアジェのいう精神発生のプロセスとパラレルな関係であるということができよう。

思えば、言語学においても、比較言語学から出発し、ソシュールの構造言語学へ展開したこと、あるいはアメリカ構造主義からチョムスキーの生成文法へ、さらにレイコフの認知言語学へ展開

していったことは、個々の事象の説明から、事象の意味の理解へと展開しているといえる。つまり、言語学も、ピアジェのいう精神発生のプロセスとパラレルな関係をなすということができるのではないか。

確かに、単なる言語の収集から言語の本質的な構造の解明へ向かう言語学史の流れは、ピアジェのいう精神発生史とけっして別のことではない。チョムスキーやレイコフの言語理論は、それまでのような言語をモノとして扱うかのような姿勢とは一線を画している。すなわち、言語が人間の「機能」であることを前面に打ち出したものになっている。たとえば、チョムスキーの問いであるところの、なぜ子どもはみんな言語を習得することができるのか、さらには、なぜ子どもは極めて短期間で言語を習得することができるのだろうか、という問いは、その答えとして、文法機能は、人間に先天的に備わっており、文法そのものは自律的な存在であるという考え方を用意している。すなわち、言語は、人間の脳の「機能」であることを明確に主張したのである。レイコフも、チョムスキーの理論と対立するところはあるものの、言語は人間と環境との相互作用によって構築されていく「機能」であるとする点においては、軌を一にするといっていいただろう。

そして、このチョムスキーとレイコフの研究史において重要なことは、両者ともヒトという生物の属性として言語機能をとらえている点にある。自己非自己に限らず、言語における何らかの意味を問おうとすると、生物、ひいては生命のなんたるかを問うことと別のことではなくなってくるのである。つまり、言語について考察していくと、生物について考察することになり、生物について考察することは同時に、言語について考察することにもなる、ということである。

となると、言語に軸足のある者は、生命に対する論考から言語のなんたるかを論じるのがとるべき方法のひとつだといえるだろう。

生命とは何か。生命の定義は、ちょうど言語とは何かと聞かれても容易には答えることができないのと同じように、生物学は生命とは何かという問いには、十分にこたえることはできない。それでもなお、生命というものの定義を試みようとするなら、けっして外すことができないキーワードがある。すなわち「細胞を包む壁」であり、あるいは「細胞を包む膜」である。細胞壁あるいは細胞膜は、外界と自分とを画然と峻別するための構造である。もし、細胞壁や細胞膜がなかったとしたら、生物は生物たり得ない。そこに自己の出現はないということになる。細胞壁あるいは細胞膜が存在するということは、物理的に自己と他者とを区別するということである。となれば、生物の根本とは、自己と他者とを隔てて、両者を区別することに他ならない。

生命が生命たりうる根源的な論理、それを「生命のロジック」と呼ぶとするならば、生命のロジックは、自己と他者とを区別することに他ならない。区別することで、生命であるところの自己が出現するのである。

となれば、自己と非自己とを区別する生命のロジックは言語のロジックでもある。呼吸や消化、あるいは循環などと同様、生命のロジックに司られた生命の機能の一つとして言語機能をとりえとするなら、言語の根本は、自己と他者とを峻別することにある。

### 3. 言語とは何か？

自己と非自己とを峻別することが生命のロジックであるとし、それがすなわち言語のロジックでもある、と仮定したとき、興味深い研究がある。

神尾昭雄が『情報のなわ張り理論』（1990）で展開した「なわ張り理論」である。なわ張り理

論とは、一言でいえば「心理的距離の概念に基づく情報表現の理論」(神尾 1990)であり、言語使用の場において情報のやり取りが行われるとき、その情報が言語主体にとって、近い領域のものであるのか、遠い領域のものであるのかを、区別することが言語の目的であるというものである。情報のなわ張り理論は、情報という視点から、言語における自己(近い領域)と非自己(遠い領域)を区分する理論である。

神尾のこの研究のきっかけは、一般的認知能力がどのように言語または言語使用に反映しているか、あるいは言語または言語使用がどのように一般的認知能力によって司られているか、という関心に発しており、いわば言語をヒトの能力のひとつとして認識するとき、得られる結果は、自己と非自己を区別する構造にあるということに帰着するのである。

さらにいえば、神尾は、この理論の主要概念である「なわ張り」について、「行動生物学(ethology)において最も深く研究されている」とし、さらに、自分の研究は「情報のなわ張りの概念が行動生物学的ななわ張りの概念に根ざすものであり、したがって生物学的な基盤を持つものである」と規定している。

もはや、言語の研究によって得られた自己非自己の構造と、生物あるいは生命の研究によって得られた自己非自己の構造は、同じものであるとっていい。

神尾 1990もチョムスキーを批判するかたちで、「言語体系をあくまで1つの独立した自律的組織とみなす最近のモジュール的アプローチに1つの疑問が投ぜられよう。なぜならば、根本的に同じ一組の概念が一般的認知能力、言語使用の仕組み、言語体系の3つを貫いて働いていることを、本書の結果は示唆しているからである」としている。

生命哲学者の村瀬雅俊は、多田富雄のこの生命論を高く評価している。これをメタ生物学ととらえ、こうしたアプローチについて、『歴史としての生命』(京都大学学術出版会、2000年)では、「生命現象の網羅的記載にとどまらず、体系的記述に向けた‘意味づけ’や起源の探求あるいは理由や原因の探索を行い、解釈を打ち立てる学問である」(村瀬 2000, はじめにiii)として、自身もこれを標榜した。そして、その結果、村瀬は「自己非自己循環理論」という生物のプロセスモデルを提示するに至った。「自己非自己循環理論」とは、「自ら孤立し閉じた構造をとる自己が外界である非自己とどこまでも循環するという過程を特定し、それによって生命現象を統一的に記述する理論」(村瀬 2000, はじめにiv)であるとしている。

同書の別のところで、村瀬は自己非自己循環理論について、別の表現で説明している。

「これまでの生物学は、自己複製過程による、いわば“自己保存”的な特性に着目してきた。これは‘連続’の世界観を背景にしていると言える。それに対して、私が主張する“自己・非自己循環理論”は、新しい構造の構成過程に着目した‘非連続の連続’の世界観を背景にしているという特徴がある。」(村瀬 2000, p10)

循環するとは、多田富雄の免疫系の非自己を認識する仕組みと同様で、自己を中心として、自己が非自己と循環することである。さらに言えば、自己が非自己を取り込んで、新たな自己を現出させるということである。いわば、構造が入れ子型の発展を遂げていく、連続したシステムが、自己非自己構造である。自己非自己構造は、助詞や助動詞の文法カテゴリに見受けられるが、そのひとつひとつの自己と非自己の一对の単語は、幾層にもなって構成されている。循環というよりも、スパイラル状に認識は連続して展開しているといえるだろう。

自己と非自己とがスパイラル状に循環して発展していくというのは、具体的にどのような

のか。たとえば、助詞のハとガは、ともに主題あるいは主語を表すなど、文の動作主を表現する。それらハとガが承ける情報には違いが存在する。すなわち、ハで承けた場合、それは話し手あるいは聞き手にとって既知の存在となり、一方、ガで承けた場合、それは話し手あるいは聞き手にとって未知の情報となる。ガには疑問詞（誰、何処、何時など）が位置することなどからも、それはわかる。しかも、既知を受けた場合、それぞれの助詞が承ける情報と逆の情報を従えている。これを図で表すと以下のようになる。

既知情報 + ハ + 未知情報  
未知情報 + ガ + 既知情報

つまり、既知の情報を受けたら、未知の情報とリンクすることが予定されている。逆に未知の情報は、自己がすでに理解しているものと対比させることによって、未知情報を取り込んでいく。いったん取り込まれた未知情報は既知情報に統合させられることによって既知情報となり、また新たに未知情報を得ることができるようになる。これをもって、循環ということができよう。

((((既知 + 未知) + 未知) + 未知) + 未知) + 未知) + 未知 ……

自己が非自己と対立し、自己が非自己を取り込む。非自己を取り込んだ新しい自己が、またあらたに非自己と対立し、それをまた新たに取り込んでいく。こういった同じ行為の繰り返しが自己非自己の特徴でもある。これはちょうど単純な図形が階層的に繰り返されて、より複雑で高度な図形を構築するフラクタル図形となることと類似している。

こうした既知情報と未知情報とを対立そして融合させていく構造が言語であるわけだが、言語は、こういったプロセスを経ることによって、いったい何を求めているのか。言語の目的とは何であるのか。

生物としてのヒトが、言語機能を用いて期するのは、コミュニケーションだろう。すなわち、自己以外の他者との接触である。コミュニケーションとは何かという問いを立てたとき、それは他者と理解しあうことなどといった素朴な理解があるとする。しかし、ここまで見てきたとおり、言語は、その基本的なシステムとして、自己と非自己とを対立させるという方法を選んでいく。これは、お互いが理解しあうことといった美しい言語観とは正反対である。

その目的が他者との接触であることは認められるとして、その先の他者と理解しあうという素朴な理解も方向性として妥当だと仮定する。とすると、理解しあうために、自己と非自己とを対立させるということはどういうことなのか。

言語は、お互いが理解しあうためのコミュニケーションであり、一方で言語は自己と非自己とを対立させる構造体であるとする、お互いが理解しあうためのコミュニケーションとは、自己と非自己とを対立させることである、と理解することができる。つまり、お互いが理解しあうということは、お互いが同じであることを認めるのではなく、お互いが異なるということを認めることにある、という理解である。したがって、言語は、お互いが理解しあうコミュニケーションのために、自己と非自己とを対立させ、それを階層的に繰り返していく、ということができる。お互いを区別し続けることが、コミュニケーションというものの真の姿なのである。そして、それが言語の目的である。



言語はつねに非自己という新情報と対峙し続けることによって、新たな自己に出会うことができる。コミュニケーションは、純粹に他者そのものに出会うためではなく、非自己という他者に出会うことによって、創造される新しい自己と出会うために存在する構造でありプロセスなのである。

生体が生命を維持するために不可欠な機能である、呼吸、循環、消化は、自己の物質的な情報と非自己の物質的な情報とを対峙させ、交換あるいは循環、あるいは融合させることによって、新たな自己を構造化させていく。呼吸は酸素と二酸化炭素とを循環させる。循環はまさにエネルギーと老廃物を循環させる。消化は食物との接触によってエネルギーを循環させる。これらは、自己を確立するために、非自己を吸収するという循環的構造を構築させている。さらには、性という機能あるいは現象も、自己を存続させようという意思が作り出したといえる。性を発生させ、自己と非自己とを対立させそして融合させる。そうして非自己を取り込み、新しくかつ強力な自己を創造していく。これもまた生命のロジックに支えられたコミュニケーションである。

なぜ、言語は、自己と非自己とを対立させるのか。それは言語が生命のロジックにしたがっているゆえである。生命のロジックとは、自己と非自己とを対立させ、そこから自己を自己として構造化させるというプロセスによって自己は成立するのだというロジックであり、自己と非自己とが対立することによってはじめて、自己という生命が成立するというロジックである。非自己がなければ、自己は成立しないし、そこに生命は存在しない。すべては言語が生命のロジックに立脚するコミュニケーションであるからであり、これが言語の目的であり、生命の目的であるからである。

生命と何かという問いに対して新たな地平をひらいた福岡伸一の『生物と無生物のあいだ』（講談社、2007年）は、生命を「動的平衡（dynamic equilibrium）にある流れ」であるとした。「動的平衡」とは「絶え間なく壊される秩序」の別の謂いであり、福岡伸一は、私たち生命体は、たまたまそこに密度が高まっている分子のゆるい淀みでしかない、と表現している。そして、その分子のゆるい淀みは、高速で入れ替わっていて、この流れこそが「生きている」ということに他ならないとしている。

言語は、生命という現象を支えるためにさまざま存在し、しかし、同一のロジックに支えられた生命の機能の一つである。ゆえに言語は、自己と非自己とを対立させ、階層化させ、循環させていくという構造を有するのである。

## 参 考 文 献

- ・神尾昭雄『情報のなわ張り理論』（大修館書店、1990年）
- ・神尾昭雄『続・情報のなわ張り理論』（大修館書店、2002年）
- ・多田富雄『免疫の意味論』（青土社、1993年）
- ・多田富雄『生命の意味論』（新潮社、1999年）
- ・村瀬雅俊『歴史としての生命』（京都大学学術出版会、2000年）
- ・福岡伸一『生物と無生物のあいだ』（講談社、2007年）
- ・ジャン・ピアジェ（Jean Piaget）[著]／芳賀 純 [訳]『発生的認識論』（評論社、1972年）
- ・ジャン・ピアジェ（Jean Piaget）、ロランド・ガルシア（Rolando Garcia）[著]／藤野邦夫、松原 望 [訳]『精神発生と科学史 知の形成と科学史の比較研究』（新評論、1996年）

[2011. 9. 29 受理]